



**Data** 2022-95

監督・脚本：三木聡

企画：マーク・シリング

出演：成田凌／前田敦子／六角精児  
 ／片山友希／岩松了／洪川  
 清彦／ふせえり／松浦祐也  
 ／BIGZAM／藤間爽子／小田  
 ゆりえ／影山徹／シヤラ ラ  
 ジマ

## 👁️👁️ みどころ

“脱力系”で名を上げた三木聡ワールドは、バカバカしいが面白い。しかも、“フーテンの寅さん”のような強力な1人の個性ではなく、映画ごとにケツッパな奴が登場するから、それが楽しみだ。

例年以上の水害が多発する2022年の日本列島のクソ暑い夏には、そんな三木聡ワールドがピッタリ！本作のアイデアは、「どこにでもあるコンビニが異世界の入口だったら・・・？」というものだが、さて・・・？

悩める脚本家と束縛系の変人夫、そして妖艶な人妻が織りなす三角関係を含む“条理が不条理になる「おかしな話」”とは？



### ■□■クソ暑い夏には三木聡監督の“脱力系”がピッタリ！■□■

2022年の夏はバカ暑い。そのうえ、水害が多発する亜熱帯地域に変容しつつある(?)日本列島の異常気象は、ますます強烈になっている。

そうすると、つい思い出すのが『ダメジン』(06年)、『シネマ11』247頁)。同作で、三木聡監督は“脱力系ここにあり！”を日本中に知らしめた。彼はその後、『図鑑に載ってない虫』(07年)、『シネマ15』425頁)で“魔術系”の新境地へも到達していた。その後の彼の作品は見えていないが、クソ暑い夏には三木聡ワールドがピッタリ！しかも、本作には私の大好きな元AKB48の前田敦子が出ているから、こりゃ必見！

### ■□■原案(プロット)は誰が？映画はアイデアが命！■□■

三木聡作品は監督と脚本を兼ねるのが常。本作もそれは同じだが、事前情報によると、本作については、映画評論家のマーク・シリング氏が原案(プロット)を携えた上で、監督に三木を指名したらしい。直近に届いた最新の『キネマ旬報』8月下旬号は、28ページから10ページにわたって本作を特集していたから、これを読めばそれについての情報

もバッチリだ。

その特集では、2本のインタビューと1本のコラムがあるので、これは必読。とりわけ、三木監督のインタビューでは、①不条理が増幅する“出口のない迷路”、②不条理の中に組み込まれたサスペンス、③法則性の中にバグを起こす面白み、等の項目で、“条理が不条理になる「おかしな話」”たる本作について語られているので、これは必読！

## ■□■コンビニの価値は？超大型冷蔵庫の奥には何が？■□■

コンビニエンスストアの発祥は1927年のアメリカに始まるから、その歴史は古い。日本では1980年代に急速に広まったが、それはスペースを売る都市型小売店の24時間利用できる備蓄庫としてのブランド価値が認められたためだ。したがって、その品揃えは豊富で、超大型冷蔵庫の中にはビール、お茶、ジュースと、ありとあらゆる飲み物が・・・？そんなわけではないが、そんなふうに錯覚させるのが、すぐに“和製英語”として定着した“コンビニ”の価値だ。

他方、脚本を命とする映画では、さらに脚本に至る前の原案（プロット）、つまり“思いつき”が大切。しかして、映画評論家のマーク・シリリング氏が思いついたのは、コンビニにある超大型冷蔵庫のさらに奥には無尽蔵の備蓄倉庫があるのではないか？いや、きっとあるはずだ！というアイデア（妄想）。

ポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』（19年）（『シネマ46』14頁）では、後半から異次元のあっと驚く“地下世界”が登場してきたが、本作でもある日、本作の主人公である売れない脚本家・加藤（成田凌）がコンビニの超大型冷蔵庫から飲み物を取り出そうとすると・・・。

## ■□■異次元の別世界では一体どんな物語が？■□■

「国境の長いトンネルを抜けると雪国であつた」。これは川端康成の小説、『雪国』の有名な書き出しだが、本作では「コンビニの超大型冷蔵庫を抜けると、霧の中にたたずむ別のコンビニがあった」となる。

コンビニは時価の高い都心に設置してこそその価値だから、誰もいない田舎にぽつんと1件建っているという設定自体がそもそもナンセンスだが、三木ワールドでは何でもあり！また、駐車場に停めたはずの車がなくなってしまうと、コンビニの店員だという美人の恵子（前田敦子）が泊めてくれるという話になっていくから、アレレ、アレレ・・・？それはそれでいいのだが、恵子の夫（六角精児）はひどい束縛系の変人男だったから、加藤と恵子がいい仲になっていくと、そりゃヤバイ・・・。すると、本作はスリラー系サスペンスに？いやいや、三木ワールドでそれはないはずだ。すると、異次元の別世界で展開していくハチャメチャな物語とは？

## ■□■前田敦子の空気感に注目！三木ワールドにピッタリ！■□■

大島優子や前田敦子等、かつてAKB48の“センター”に立った女の子が、“卒業”後、

俳優として活躍する姿を見るのは楽しい。『もらとりあむタマ子』（13年）（『シネマ32』125頁）を見れば、前田敦子の女優としての才能がよくわかる。それからすでに10年近く経っているから、彼女もかなりのおばさんに？そう心配したが、本作にみる、霧の中にたたずむコンビニ「リソーマート」で働く妖艶な人妻・恵子役はお見事。彼女が醸し出す一流独特の“空気感”は、まさに三木聡ワールドにピッタリだ。また、恋人のジグザグ（片山友希）の飼い犬“ケルベロス”に振り回される、売れない脚本家・加藤役を演じる成田凌も本作の主人公にピッタリ！

本作では、恵子の夫を含めた3人の男女が織りなす“三角関係”にも注目しながら、“条理が不条理になる「おかしな物語」”を存分に楽しみたい。

2022（令和4）年8月12日記